



受難の主日 (ルカ 23:1-49)

枝を手を持って、主キリストを喜び迎えよう

受難の主日、イエスが弟子たちと過ごす最後の一週間をたどっていきます。わたしたちも、イエスが弟子たちに最後まで示される愛と模範を確かめるために、イエスの後について行きましょう。

今年の受難の主日は、わたしもみなさんとの最後の聖なる一週間ということになります。主任司祭として、最後まで任せられた信徒に精一杯真心を示し、模範を示すことができるよう心掛けたいと思います。

今日の受難の主日は、駆け足で聖週間をおさらいするようなものです。イエスは歓呼の叫びの中をエルサレムに入られますが、その同じ群衆によって「十字架につけろ」と叫ばれます。

しかし、イエスは最後まで勝利者としてふるまわれます。十字架につけられたイエスはひとことも不平を口にしませんでした。人々のあざけりを「今に後悔させてやる」と恨むこともしませんでした。なぜならイエスは、敗者として十字架につけられたのではないからです。

ではどこに、勝利者としてのイエスを見ることができのでしょうか。わたしは、十字架につけられたイエスの「釘打たれた手」が、勝利者のしるしではないかと考えました。イエスははりつけにされるとき、十字架に釘づけにされました。当然、イエスの手を無理やり開いて、釘を打ったことでしょう。

開かれた手は、何を意味しているのでしょうか。わたしは、「与える姿」を示していると思います。わたしたちは物をつかむとき必ず手を握りしめます。手を開いては、物をつかめないからです。つまり、手を開いている状態は、物を握りしめている姿ではなくて物を手放す姿、それはある場合には物を与える姿なのではないでしょうか。

ですから、イエスが十字架にはりつけにされて釘打たれた手は、わたしたちに最後まで何かを与え続ける姿なのだと思います。イエスの右に十字架につけられた犯罪人に対して、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」(23・43)と言われました。これはイエスが犯罪人に楽園を与えているということです。

またイエスの最後の言葉は、「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」(23・46)でした。これもみずからを与えつくす姿ではないでしょうか。イエスは最後まで与えるお方として十字架の上におられます。疑いもなく、与えることのできる方は、敗者ではなく勝利者です。

イエスは勝利者です。十字架の上で与えることのできるお方です。勝利者であるイエスの完全な姿は、言うまでもなく復活の姿です。イエスの復活のその時まで、イエスについて行きましょう。罪によって離れてしまう弱く貧しい者ですが、わたしたちを十字架で救ってくださるイエスに信頼を寄せてこの一週間を過ごしましょう。